

高校生へ
私が選んだ
1冊の本

宇宙を読む

カラー版

谷口 義明：著

(中公新書)

よく晴れた日。ふと夜空を見上げると、無数の星が所狭しと瞬いている。それを眺めていると、「宇宙には一体どれだけの星が存在し、何故輝いているのか」という素朴な疑問を抱く。このような疑問に、最新の研究成果で答えてくれるのが本書である。

著者は、「天文学は意外と身近な学問」と言っている。確かにそうかもしれない。天文学というと難しく考える人が多い。「まえがき」で、「宇宙を調べる基本は見ること」と述べているように、星を見ることから天文学は始まる。ただ、星を「見る」方法は双眼鏡や望遠鏡で見ることだけではない、ということ本書で教えてもらった。恥ずかしながら、私もこの本に出会うまでは星を見るということそのように考えていた。しかし、肉眼や望遠鏡で見ていた星の輝きは、その星から発せられる「熱放射」という電磁波の1つ、つまり、可視光のみを見ているだけだった。星を可視光以外で「見る」ための新たな方法を本書で知ったのである。

実は、天体からは全ての波長帯で電磁波が放射されている。著者は、天体からやってくるさまざまな種類の電磁波を「天からの文(ふみ)」と表現し、その「文」をいかにうまく受け取り、解読していくかが宇宙を理解する上での重要な鍵となる、と言っている。この言葉に私は、星や宇宙に対するロマンをよりいっそう強く感じた。雪博士

として知られる中谷宇吉郎博士の「雪は天から送られた手紙」という言葉も思い出した。天文学者が、日々「天からの文」の謎解き、つまり天体からやってくる様々な「電磁波」の解読で新たな発見ができるかもしれない、と毎日をワクワクした気持ちで没頭できることを羨ましく思う。そして、ぜひ1つでも多くの「文」の謎を解読して欲しい。それが、私たち人間が今ここに存在している理由をも解明することにつながるかもしれないから。

本書は、天文学や宇宙についてそれほど知識を持っていなくても、すんなりと読み進むことができる。また、今まであまり述べられていなかった「電磁波」という視点から宇宙を語る新しい切り口が面白い。さらに、美しいカラーの天体写真や最新の研究データをふんだんに盛り込み、難しいことも易しく解説してくれるので、読者を飽きさせない。前半(第1・2章)は、「天からの文」を読み解く方法が語られ、ここで「全波長帯天文学」とはどのようなものか、を知ることができる。後半(第3・4章)では、「天からの文」の解読の結果見えてきた、宇宙の姿と歴史が語られている。

今年8月に行われた国際天文学連合(IAU)総会での決議で、太陽系第9惑星として位置づけられていた冥王星が、惑星の分類からはずされることになった。本書が出版されたのは7月で、この決議が採択される以前であった。第3章の中に「冥王星の彼方に広がる太陽系の姿」という項目がある。これから冥王星に代わる第9、10の惑星、あるいはそれ以上の惑星の存在、また、海王星以遠の太陽系の姿はどうなっているのか解明されていくことだろう。とても興味深く、今後注目していきたい。

難しく考えずに一度読んで欲しい。本書を読み終えた後に眺める星空は、またひと味違ったものに見えるだろう。そして、星々からいろいろな「文」をあなたに投げかけてくれるだろう。

(さいたま市立大宮西高等学校3年 中野渡 美帆)

通巻第61号
2007年2月1日 印刷
2007年2月5日 発行

©編集・発行

実教出版株式会社

代表者 島根正幸

定価 210円(本体200円)

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町5

TEL. 03-3238-7777

<http://www.jikkyo.co.jp/>